ヴェニス社会と人種
―『オセロー』における時代背景と諸問題―

02E069　宇治　瑞季

はじめに

この論文では、『オセロー』の舞台となっているヴェニス[1]という特異な社会背景を持つ国と『オセロー』における人種の双方にスポットライトを当てて考えていく。

ヴェニスという125の島から成る、決して大きいとは言えない国は、深い独自の歴史を経て築かれていった。そして、ヴェニスに住む人々には次第に、この国特有の商業的な頭の回転の良さ、優れた開拓能力、誠実さ、また根性や努力といったものが培われていった。しかしその反面、人々には冷静沈着な打算、抜け目のなさ、ずるさ、汚さなどの性格も同時に形成されていった。この時代背景こそがイアーゴーを生む最大の要素になったと言える。そして、この特異な社会の中にムーア人という、いわば客人を招くことにより、様々な効果を物語全体にもたらし、大きな問題を私たちに投げかける。

まず、本稿の第1章では、イアーゴーを生んだヴェニス社会について歴史、宗教などの面から言及していく。更に、第2章では、視点を主人公オセローに移し、彼の肌の色がシェイクスピアの生まれた国であるイギリスではどのように認知されていたのか、また『オセロー』およびヴェニス社会でどのような意味を持つのかを考察していく。最後に第3章において『オセロー』を読んでいくにあたり、必ず突き当たる大きな問題の一つである「イアーゴーの復讐の動機」について考えていく。

これらを通し思い浮かぶ事は、『オセロー』はヴェニスを舞台にしなければ成り立たない物語であるということである。もしこの物語の舞台がイギリスやフランスなら、もしこの物語の主人公が白人だったら、『オセロー』は後世に名を残す作品にはならなかっただろう。舞台がヴェニスだからこそ、主人公が黒人だからこそ、『オセロー』は輝きを放ち、シェイクスピアの四大悲劇の一つに数えられているのだ。

第1章　ヴェニス社会が与える『オセロー』への影響

1．大まかなヴェニスの歴史の流れ

ヴェニスという特殊な地を知るためには、まずヴェニスの起源[2]について知っておく必要があるだろう。その頃の人々の生活を知る上で最も重要とされている史料は、ラヴェンナに総督を置いていた東ローマ帝国皇帝に仕えた、南イタリアのカラーブリア地方出身のカシオドーロという人物が西暦538年に書いた文章である[3]。

> そこに住む人々が豊富に持っている食糧といえば、魚しかない。貧しき者も豊かな者も、平等にそれを分かち合う。これと、ほとんど同じような造りの家々は、他人を羨望という世の悪から、お前たちを遠ざけている。
>
> お前たちの主な産業は塩田の開発で、他の土地の人々が畑で鋤をひき鎌を使う代わりに、お前たちは

塩を細かくするために石臼をまわす。黄金は、それを持たなくても生きていける。だが、食物をより美味にする塩は、誰もが欲しがるものだ。このために、お前たちは塩を売って、他の必要とする品々を買い求める事が出来るのである[4]。

この文章からもわかるように、漁業と製塩は万人に等しく開かれた職業なのであって[5]、「海」という特殊な環境が封建制ではなく、やがて訪れる共和制へ導く結果になった。そしてここからヴェニス人は「無」から「有」を造りだすということを強いられた。すなわち、ヴェニス人の「努力」がここから始まったと言える。

7世紀になると、今まで司祭を中心として教区ごとに移住していたヴェニス人であったが、本土からの移住で移民も徐々に増え、人口も増した。それ故、司祭を中心に、教区ごとにかたまって住んでいた人々も、それらをまとめた共同体を、そしてそれを率いる長を必要としてきたのであった[6]。そして、697年にヴェニス人は初めて住民投票によって、元首（ドージェ）を選出した[7]。選挙による選出と、終身の役職であるこの制度の最初だった。難民によって成り立ったこの小さな国も、国家としての形を整えはじめたのである[8]。

それから2世紀後の9世紀には、フランク軍との争いの中、ヴェニス人は、潟の他の島と比べるとずっと辺鄙な、満潮時でも頭を覗かせている潟の中央（今のリアルト地区）へと移り住んだ。その場所を選んだ理由は次のようなものだ。（1）潟の中央は陸地から最も遠く離れていた。（2）沼沢地帯であった事と、外海とは直接に接していないために安全な地であると同時に、リドまでの水路を港の入り口のように整備すれば、場所によっては大型の船の横付けも可能な事であった。それはつまり、他のどの海軍よりも強力な海軍さえ持てば、敵の襲撃を防ぐ事は出来ることと、同時に、彼らの足となった船舶による貿易の将来も開けるという事である。ただひたすら安全なだけの地を求めて逃げ回った頃の先祖とは、この頃のヴェニス人は違っていた[9]。安全性だけでなく、天職である貿易商人としての将来性と、更に自国防衛をも視野に入れ移住したのだ。

しかしながら、そこにはやはり塩と魚しかなく、ヴェニス人は5世紀同様、再び「無」から「有」を造りだす「努力」を強いられた。「無」から「有」を作り出すには、まず土台固めをしなければならなかったが、その土地には木材すらもない。よって、塩と魚以外は他の国に頼るという選択肢しかなかった。つまり、二度の開拓作業を行う上で、その二回ともに、自給自足の概念は当時のヴェニス人には無かったに違いない[10]。そして、この自給自足の概念の完全な欠如は「物々交換」「等価交換」の概念を生む結果に繋がり、生きていく手段として他国との貿易を切実に考えていったに違いない。

ゲーテは、「ヴェニスに住む人々は、独特な人格に必然的に変らざるをえなかったであろう。ヴェニスが他のどの都とも比較しようのない都であるということを以て」という言葉を遺している[11]。ここからも解るように、ヴェニスの人々は陸とはかけ離れた狭い土地、魚と塩しか無い環境という特殊な場所によって育てられたと言える。度重なる一連の行動こそが、いわば根底部分である「努力」と、何とか環境に適応しようという商人的要素の結晶、すなわち、ヴェニス精神の「生みの親」になったと言える。そして、このことが後世のヴェニス貿易での基盤になり、世にヴェニスを示すきっかけになっていった。

ヴェニス人が開拓に費やした長きに渡る日々を越えて、本格的に商人として頭角を現してきたのが恐らく海洋交易時代である。この頃になると、塩と魚が主となっていた貿易から、他国のニーズにあった商品の売買に代わっていった。これが功を奏し、貿易の拡大に繋がった。そして、この順風満帆な交易はしばらくの間続くことになる。しかしながら、政治面においては13世紀末から14世紀にかけて、あらゆる意味で危機の時代だ

った。ヴェニスの体制は崩れ、それを再復できる望みはなかった。また、十字軍の壊滅に怒った法王によって、回教徒との貿易も困難を極めていた。西欧の情勢も、各国で中央集権の動きが目立ち始めた。もちろんこの時代のこのような周りの動きにヴェニスも無縁でいられるはずはない。ここでヴェニス人は統治能力に優れた政体を持つ必要を感じた。そして、のちにヴェニスでは以後の共和国の政体を決する事になる、一つの改革が行われた[12]。

この改革の推進者は、元首ピエトロ・グラデニーゴといった。彼は1297年に以下のような、共和国国会改革案(マジョール・コンシーリオ)の提出を行った。

「共和国国会に席を置く現議員は全員、さらに四年前にさかのぼって、その間議席を持っていた者で『四十人委員会(クワランティア)』の十二票を獲得できた者は、終身任期の議員とする[13]。」そして二年後には、さらに改革を推進し、「元首と六人の元首補佐官によって推薦された者で、『四十人委員会』の過半数の賛同を得られたものは、共和国国会の終身任期の議員とする[14]。」

これにより、有力家系に属さなくても適材と判断した人々を、メンバーに加える事に成功した。そして、一連の改革により、特権階級を形成し、自己を明確に定義できるようになった。しかし、それは政治を貴族階級だけが独占し、市民はそれから締め出されるという結果を招いた[15]。現に、この改革前には、貴族と平民の明確な区別はなく、法的にも同じ土台の上に立っていたが[16]、改革後のヴェニスでは、共和国国会に席を持つ者を明確に貴族と呼ぶようになったのだ。そして、この共和国国会議員を世襲制にすることにより個人の野心と、それと結びつく大衆という二つ共を押さえ込むことに成功した[17]。このように、中世で最も商人的な国家と言われていたヴェニスは、敵対していたジェノバやフローレンスとは違った政体を選び、それは統治能力に優れた政体を選ぶ事に繋がっていった[18]。

古代ローマ帝国、ビザンツ帝国、オスマントルコ帝国などのような資源にめぐまれた陸地型の国家ならば、非能率的な統治が続いても、それに耐えていけるので、多少の悪政が続いても、それが帝国崩壊に繋がるには、長い長い歳月を要する。一方、資源に恵まれないヴェニスのような国家には、失敗は許されない。それは直ちにヴェニスの存亡に繋がってくるからである。都市国家や海洋国家の生命が短いのはこの理由から[19]。だからこそ、この政体はヴェニスの存続のためは必要不可欠な政体だったのかもしれない。

1430年には初めてオスマントルコ帝国との衝突があった。それ以来オスマントルコ帝国とは因縁の仲になり、再三講和はするものの、度々衝突することになる。その中でもヴェニスは何度となく海戦を経験し、その名声を世に知らしめた。

1571年のレパントの海戦は『オセロー』では記憶に新しい海戦だ。ここでヴェニス軍はスペインとローマ教皇との神聖同盟によりオスマントルコ軍を撃退し、勝利を収めた。しかしながら、度重なるオスマントルコとの衝突で、塩・砂糖・木綿・原綿を産出し、シリアへの航行に不可欠な中継地として重要であったキプロス島を失い、貿易に大きな影響を与えた。更に金銭面でも戦費が重み、金融機関に危機的状況をもたらし、それによって貿易面においても更なる打撃を与えた。またヴェニスには長期の戦に耐えるだけの国力も無かった。このような様々な事柄により、ヴェニスの国力は急速に衰えていった。そしてついに1797年にナポレオン・ボナパルトに侵略され、ヴェニス共和国は滅亡の時を迎えることになった。

2．宗教

ヴェニス人がラグーナに移住してきたきっかけは神からの御告げによるものだった。しかし、同時代の他国の人々に比べて、特別に信仰が深かったわけではない。陸から遠かった分、狂信的信仰からも最も遠いところにいたのだ[20]。彼らはキリスト教を信仰していたが、それよりも優先するものがあったため、宗教は二の次だった。

中世の西欧キリスト教世界には、権力構造の定義として、「上から」と「下から」との、二つの定義があった。まず「上から」とは、神、法王、皇帝、君主と、権力構造が上から下へさがってくる型なのである。一方、「下から」とは、住民共同体が法によって代表を選ぶ型で権力構造は、当然下から上へと向かう。民主主義政体と言うものであろう。両者とも、独自のイデオロギーの上に立っている事では変わりない。しかし、２つの型とも、中世のキリスト教世界では、無視できない欠陥を持っていた。まず、「上から」の場合は、宗教の介入を許すことになる。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」であるはずなのに、キリストの後継者たちはそれを完全に忘れ、皇帝のものまで神のものであるとしたため、問題は厄介になってしまった。かといって、「下から」の場合も、欠陥がないわけではない。こちらは、人間の欲望をコントロールするのが非常に難しくなるという欠陥を持っている。そこで、現実的なヴェニス人は、イデオロギーに関わらずに、どうすれば実害をより少なく出来るかという視点からだけ考えて、前者と後者を組み合わせた型を考え出したのだ[21]。

現に中世のヴェニスは、十字軍の脅威からも、宗教改革や反動宗教改革の独断からも、魔女狩りや異端裁判の気狂い沙汰からも、自由でいられた。また、中世の言論の自由はローマ教会の権威の及ばないところにしか存在しえなかったため、ルターもエラスムスもマキアヴェリの書物も、ヴェニスでなら自由に手に入ったという[22]。

3．ヴェニス社会とオセロー

貴族は、各種の行政官、地方の司令官、外国への使節、ガレー船乗り組みの司令官といった800以上のポストを占めていた。そこには、コレッジオ、十人委員会、大使、主要都市と重要な島の司令官、元老院の小委員会のメンバー、海軍の幹部と言った100以上の役職も含まれていた[23]。つまり、オセローはヴェニス社会においては「貴族」という部類に入れられたわけだ。だが、実際は、海軍と国家存亡を決する基と考えていたヴェニスでは、商船の船員に至るまで自国民で固めていたので、海軍の要職や海外基地の司令官に、黒人に限らず他国の人間をすえるというような事は、絶対にありえないことであった[24]。それだけヴェニス人は(同じヴェニス人ならばまだしも)他人を信用する事はなかった。

しかしオセローは、シェイクスピアが与えた黒い肌を持っている貴族であり、同時にムーア人でもある。そしてそれにより、ヴェニス社会に入り込んだ客人という目で見られ、ヴェニス社会に溶け込む事が出来なかった。例えば、宗教に関して見てみる。ヴェニスはやはりこの部分においても独自に関わっていた。そして、宗教よりも商人としてのヴェニス人が先に立っていて、ヴェニスは他の国に比べて宗教意識が比較的低かったということを再確認しておく。それにも関わらず、オセローは「自分は間違いなくヴェニス社会の一員だ」と自己確認するかのように、仕切りに“Heaven”“Amen”などの宗教的な言葉を連呼し、自分がキリスト教徒であることを強く主張し、自分自身に言い聞かせた。

例えば、キプロス島にデズデモーナを連れて行くことを懇願するオセローの台詞を引用する。

Vouch with me, heaven, I therefore beg it not
To please the palate of my appetite;
Nor to comply with heat—the young affects
In me defunct—and proper satisfaction;
But to be free and bounteous to her mind.
And heaven defend your good souls that you think
I will your serious and great business scant
For she is with me. (Ⅰ.iii 260~267)

天に誓って申しますが、私は欲情を満たさんがため、このようにお願いするのではありません。また情熱にかられて—いや、若い血は私にはもうありません—わがままを通すのでもないのです。これの望みをできるだけ叶えてやりたいのです。神にかけて申しますが、これがそばにいるからといって、国家の大事をおろそかにするような真似は断じて致しません[25]。

更に、オセローとデズデモーナの会話からでは、"Amen to that, sweet powers！"(Ⅱ.i 192) と祈る。

キャシオーの失態に怒るオセローは、イスラム教を信仰しているトルコ人を野蛮人として、キリスト教国ヴェニスと比較し、キリスト教を善とし、キリスト教徒であるヴェニス人を位置づける。

Are we turn'd Turks, and to ourselves do that
Which Heaven hath forbid the Ottomites?
For Christian shame, put by this barbarous brawl. (Ⅱ.iii 166~168)

俺たちはトルコ人か、トルコ人でさえ我々に刃向かう事は出来なかったのに、それを自分でやるのか？キリスト教徒として恥を知れ、野蛮人のように争うな。

オセローは、自らもヴェニス社会の一個人であると主張しつつも、どこかで自分の肌の色を気にして劣等感に苛まれ、結果的にイアーゴーと共に悲劇をもたらすわけだ。しかし、だからと言って、過剰な主張は、逆に、ヴェニス人にとっては不自然な言動、行動に捉えられただろう。また、ヴェニス政府に忠実だという性格も、やはりムーア人であるが故に強く芽生えたもので、ヴェニス社会に認められたいという強い想いの表れからであると言える。

第２章　肌の色の違いが与える影響

１．「黒い悪魔と白い天使」または「黒い天使と白い悪魔」

オセローは黒人である。黒い肌から様々な物が連想され、しばしば彼は「悪魔」と呼ばれた。しかし、本当に彼は悪魔なのだろうか。公爵は彼の内面を認め、ブラバンショーに以下のような事を言っている。

…[To Brabantio] And, noble signior,
If virtue no delighted beauty lack,
Your son-in-law is far more fair than black. (Ⅰ.iii 287~289)
[ブラバンショーに]どうだろう、美徳にこころよい美しさが伴うとすれば、心美しい婿殿は、なみの白人以上に美しいとは言えまいか。

また、フィードラーは言う、「オセローが本当に黒いのは、私たちが彼を見る前だけなのだ。最初に登場してからヴェニスにとどまる限り、彼は依然としてよそ者ではあるが、元型的には白いのだ。つまり彼は黒い顔をした白いよそ者なのだ(26)。」このように、オセローは黒いが、白いとも取る事ができる面を持っているのだ。

次に、イアーゴーは白人である。それだけで清潔感や誠実さを与える。だが彼は果たして見掛け通りの人間なのか。イアーゴー自らがロダリーゴーに言った台詞を見る。

…Others there are
Who, trimm'd in forms and visages of duty,
Keep yet their hearts attending on themselves;
And, throwing but shows of service on their lords,
Do well thrive by'em and, when they have lin'd their coats,
Do themselves homage these fellows have some soul;
And such a one do I profess myself. (Ⅰ.i 49~55)
見かけは立派な忠義面、腹ん中ではひたすら我が身を大切にしている、ご主人様には忠勤ぶりをご覧に入れて、影でこっそりうまい汁をすする、たっぷりすすって私服を肥やし、あとは我が身が第一だ。こういう奴には根性がある、かく言う俺もその一人さ。

この発言から、イアーゴーはヴェニス社会の持つ商人的な部分を鏡の如く強く映し出した、いわばヴェニスが生んだ悪魔だと言える。そして、イアーゴーのした数々の仕打ちはヴェニス商人の一種の気質であり、ヴェニス社会がそのまま反映したものとも言い換えられる。更にはイアーゴー自身にヴェニス商人の末路を思わせる節も見られる。

外見は黒いが内面は白いオセローと外見は白いが内面は黒いイアーゴーという、全く違う二人を比較して気付く事は、オセローはイアーゴーの肌の色と内面の白さを心理面からも混同して考えてしまい、安易な信頼感を持った。逆にイアーゴーは、オセローの肌の色が黒いが故に最初から疑ってかかり、それを利用し、次々と罠を仕掛けていったという事である。

人間をステレオタイプで判断し、見掛けのみを基準として考える事は非常に危険な事である。偏見という曇った眼は、時に真実をも覆い隠してしまう。『オセロー』は人種という視点からも私たちに様々な事を問いかけているのだ。

2．ムーア人と呼ばれた男

オセローはアフリカ人である。アフリカ人の中でもモーリテイニアかニグロかについては、学者の議論は分かれるところだ[27]。

オセローは常に、ヴェニス社会の人種的偏見にさらされ、苦しみ、悩まされていた。それは忘れようとしても忘れられない大きな壁だったと言える。なぜなら、たとえそれを忘れようと試みたとしても、自分の肌の色を見た時、周りから「ムーア」とまるで愛称であるかのように呼ばれる時、その都度自分の劣性を確認し、黒人である事に劣等感を感じ、自分を卑下するに至るのだ。

17 世紀の終わりに、批評家T・ライマーは「黒い肌のムーア人がトランペット吹き以上の職に就くことなどありえない。自堕落な女性以外と結婚することもあり得ない[28]。」と述べている。このように、ムーア人は様々な面からリスクを背負い生きていかなければならない存在であった事は間違いない。だからこそ、ヴェニス社会で高位の地位につくためには、オセローは肌の色を超えるにふさわしい功績で周りから認められ、社会からも賞され、自分自身にも自信を与える必要があった。

実際、オセローの功績は誰もが認めるに値するほど素晴らしく、彼自身にも大きな自信になった。だが、黒人という劣等感を完全に払拭することは出来なかった。それが明確に分かるのが、オセローがイアーゴーの策略にはまり、デズデモーナに対し半信半疑になった折に発した台詞だ。

> And yet, how nature erring from itself—(III. iii　230)
> だがどうしてあれは自然の情に背いてまで—

ここですかさずイアーゴーが、

> Ay, there's the point: as—to be bold with you—
> Not to affect many proposed matches
> Of her own clime, complexion, and degree,
> Whereto we see in all things nature tends—(III. iii 231~234)
> そう、そこですよ、つまり—遠慮なく申しますが—同じ国の、同じ肌の色の、同じ身分の男から数多く結婚の申し込みがあったのに断わられた、それを受けるのが情じゃありませんか—

世間だけで無く、オセローの中でも、やはり黒人と白人の結婚というものは「自然」の摂理に背く禁忌であるという認識があり、イアーゴーによりそれが再確認された瞬間だった。それはムーア人と呼ばれた男の、ムーア人であるが故の悲劇であった。

3．エリザベス朝と『オセロー』

シェイクスピアが『オセロー』を創作した時代から、黒人に対する政治的・社会的差別は確かに是正されてきているが、心理的意味での偏見はそれ程変化していないのが実状のようだ[29]。やはり「黒」という外見色は、悪魔や野蛮人などを連想させ、周りに恐怖すらも与えた。『オセロー』の中でももちろんこのイメージは

失われなかった。次に掲げるのは、イアーゴーがロダリーゴーに言った台詞である。

> Mark me with what violence she first lov'd the Moor, but for bragging and telling her fantastical lies. To love him still for prating? —let not thy discreet heart think it. Her eye must be fed; and what delight shall she have to look on the devil? (Ⅱ. i 218~222)
> いいか、あの女が最初にムーア人に惚れたのは、夢みたいなホラ話を吹きまくられたからであろう。そんなおしゃべりのせいで、いつまでもやつに惚れていられるか一改めて考えてみるまでもないだろう。あの女にしたって、美しいものを見たくなる、悪魔みたいに黒いやつを見て何が楽しいものか。

続いてイアーゴーがブラバンショー邸前で叫んだ台詞を見てみよう。

> Even now, now, very now, an old black ram
> Is tupping your white ewe. Arise, arise;
> Awake the snorting citizens with the bell,
> Or else the devil make a grandsire of you. (Ⅰ. i 89~92)
> いまもいま、たったいま、年をくった黒羊が、あんたのかわいい白羊にのっかってますぜ。さあ、起きた、鐘を鳴らしてグースカ寝ている街の連中を起こすんだ、でないと黒い悪魔があんたのお孫さんを作っちまう。

このように『オセロー』の中においても黒いということは悪魔というイメージと隣りあわせにあった。しかしながら、イギリスにおける黒人の数はマイノリティにすぎなかった。だが、それでも黒人が与える心理的恐怖には計り知れないものがあっただろう。それにも関わらず、イギリスの黒人人口は増大傾向にあったという。そこでエリザベス一世はそれに歯止めをかけようと、1601年黒人入国禁止令[30]を出し、黒人数を制限した。この年にカスパル・フォン・センデンに発行された移送許可状では、「女王陛下の臣民で、この深刻な飢饉の時代に苦しみあえぐ者たちの救済と福祉」を慮る証として「ニグロ並びにブラック・ムーア人を、女王陛下から移送」するとある。この許可状は「女王の臣民が消費する食料を求めて」主にスペインから流れてきたニグロ並びにブラック・ムーア人という難民たちを「女王の領土における大いなる災いの種である」と述べた上で、更に「彼らのほとんどはキリスト教ならびにその福音を理解せぬ異端者である」と断定している[31]。イギリスはこのような事に対して非常に厳しく、1290年にはエドワード1世によりユダヤ人追放令が出されていた。ユダヤ人追放を国策として実行したのは西洋キリスト教世界ではこれが最初の事だった[32]。

エリザベス朝に書かれた作品では、多くの黒人は貧しさの象徴（マイナスイメージ）としての引き立て役でしかなく、良い印象（プラスイメージ）を与える登場人物として扱われなかった。もちろん、黒人を主人公にするなどという考えはもってのほかだ。だからこそ『オセロー』における黒人は、エリザベス朝作品における黒人の役割を越え、当時では非常に珍しいパターンの作品だったと言える。それだけに舞台効果は絶大で、反響も大いにあった。

次に、キリスト教徒であった黒人オセローを知る上で重要になる、エリザベス朝のキリスト教概念に目を向

け、“Christian”というキーワードから、シェイクスピア作品のいくつかの台詞を引用する。

まず、『間違いの喜劇』のアンティフォラス(弟)の台詞からの引用では、以下のようになっている。

> Now as I am a Christian, answer me
> In what safe place you have bestow'd my money, (Ⅰ.ii 77~78)
> おい、クリスチャンとして言うがだな、ちゃんと答えろ、いかなる安全な場所に金を置いてきたのか？[33]

次に『ヘンリー5世』の王の台詞の引用を見る。

> We are no tyrant, but a Christian king,
> Unto whose grace our passion is as subject
> As is our wretches fettered in our prisons; (Ⅰ.ii 242~244)
> 私は暴君ではない、一キリスト教徒としての国王だ、そのもつべき仁徳に私の感情は臣下として束縛されている、囚人たちが牢獄につながれているようにな[34]。

更に『十二夜』のアンドルーの台詞の引用からも“Christian”という言葉が以下のように見られた。

> Never in your life, I think, unless you see canary put me down. Methinks sometimes I have no more wit than a Christian or an ordinary man has: but I am a great eater of beef, and I believe that does harm to my wit. (Ⅰ.iii 81~85)
> こんなに見事に手を取られたのは初めてですよ。葡萄酒に足をとられたことは何度もありますがね。僕は時々、俺には人並みの知恵しかないのかなぁって悲観するんですよ。僕は牛肉を食べ過ぎるんでねぇ。それがきっと頭に良くないんですね[35]。

このように、シェイクスピア作品からいくつか抜き出してみたが、これらの台詞から共通する印象は、『間違いの喜劇』からの引用でも、『ヘンリー5世』からの引用でも“Christian”は「まともな人間」を示唆するかのように使われている事が解る。更に、『十二夜』からの引用では、興味深い事に“Christian”は「人並み」という言葉に非常に近いニュアンスになっており、ここでも「クリスチャン＝まともな人間」という概念が浮かび上がる。つまり、裏を返せば、キリスト教を信仰しない者は異端であり、異常者であるという事を言っている。キリスト教を信仰しない、それだけで世間から浮いた存在になってしまう。

本稿第1章の第3節「ヴェニス社会とオセロー」では、オセローはヴェニス社会の一員になりたいが故にキリスト教を熱心に信仰し、その手助けにしたという仮説を立てたが、この「クリスチャン＝まともな人間」と考えることで、オセローはキリスト教を通して、ヴェニス社会との連帯性を得たかった事や、異質な存在ではなく、決して疎外されない存在だという証を立てたかったという事が改めて解り、先の仮説は立証されたと思われる。そして、やはりレパントの海戦において、オセローの手腕もあり、イスラム教国であるオスマントル

コを撃退し、勝利を収めた事は、キリスト教を自らの存在意義としていたオセローにとっては絶大なものであったと言える。

第３章　イアーゴーの復讐の動機

舞台をヴェニスにし主人公をムーア人としたことで、複数の問題提起がなされるのは明白である。その中で一つの無視できない問題がヴェニスのイアーゴーがムーア人オセローに対し行う「復讐」である。その動機は複数あり、それは同時に『オセロー』が私たちを惹き付ける魅力であるとも言える。

まず、イアーゴーのオセローに対する目に見える復讐の動機には、イアーゴーを副官にすべく、町の三人のお偉い方がオセローの元に足を運び、頭を下げて頼み込んだにも関わらず、軍事用語などでその三人のお偉い方を煙に巻き、あげく嘆願を却下し、イアーゴーではなく、キャシオーを副官にして自分を旗手にした点と、（世間の噂で）自分のいない間にエミリアと何かあったかもしれないという疑いの念からくるものの二つが挙げられる。しかしイアーゴーには比較的明白なそれらの動機だけでなくオセローというヴェニスの面影をひとつも持たない、自分とは正反対の彼の存在の全てを否定したかったと言える。そしてイアーゴーは、デズデモーナの持っているヴェニス女の本質がよそ者オセローには全く理解できないし、解りもしないという事も指摘し、ヴェニスとオセローを切り離し、彼を排除している。

> I know our country disposition well:
> In Venice they do let God see the pranks
> They dare not show their husbands; their best conscience
> Is not to leave't undone, but keep't unknown. (III. iii　204~207)
> 私は同国人の気質が良くわかっております、ヴェニス女は、不埒な行為を神様には平気で見せても、亭主には隠します。その良心と言ってもせいぜい悪事を犯さない事ではなく、犯しても内密にすると言う事です。

つまり、裏を返して考えてみるとヴェニス女デズデモーナを理解出来るのはヴェニス男の自分しかいないということを面と向かって言っているのだ。

しかしながらイアーゴーの復讐の対象はオセローだけではない。黒人のオセローを愛するという、いわば「摂理」からの逸脱[36]を最終的に選んだデズデモーナに対してや、自分の本来狙っていたポジションに入ってきたフローレンス人[37]キャシオーに対しても嫉妬し、排除の念を抱いている。

ところで、フローレンス人というのは金融業に従事するものが多く、会計・簿記に長ずるとされた[38]。また貿易面においても繁栄を見せていた。以下のイアーゴー台詞の中には、フローレンス人に対するヴェニス人の軽蔑がこめられている。

> Forsooth, a great arithmetician,
> One Michael Cassio, a Florentine,

A fellow almost damn'd in a fair wife,
That never set a squadron in the field,
Nor the division of a battle knows
More than a spinster; unless the bookish theoric‥(Ⅰ.ⅰ 19~24)
驚いたね、人もあろうに算盤はじきの大先生、マイケル・キャシオーというフローレンス生まれの野郎だ、美人の女房もらって浮気され泣きを見るのがいいことだ。だいたい戦場に出て軍隊を指揮したことなど無いし、実戦このぞんで兵をどう動かしたらいいのかとなると小娘ほどの知識も無い。ご存知なのは机上の空論ばかり…

という具合に、当時のフローレンスとヴェニスの間柄は一種のライバル関係にあったといえる。ここから解ることは、キャシオーもまたヴェニス社会における客人だったという事である。要するに、イアーゴーにとっては、キャシオーが副官になったからというより、まずそれより先にフローレンス人であったからこそ、彼はヴェニス社会からの排除を試みたのだ。

ヴェニス人が歴史を重ねる上で常に必要になった、いわば生きていくための術を教えるべく、復讐と言う名を借りた制裁を行ったイアーゴーは「愛」を信じず、愛を信じる者を軽蔑し、嫉妬心を抱き、愛などまやかしに過ぎず信じられるものは目に見える事、感じられる事だと考えていたに違いない。だからこそ人間の純粋な部分を攻撃したのだ。

ヴェニス仕込みの巧みな話術、戦法により様々な人物が上手い具合にイアーゴーの仕組んだ罠にはまり悲劇を繰り返す様を見た彼の中では「明確な復讐の動機が生まれる→復讐を計画する→復讐」という一般的な復讐心の発生の仕方から、「相手がヴェニスに必要かの判断が行われる→復讐の動機の後付けがされる→復讐を計画する→復讐」という概念に変わっていった様に思われる。それは以下の台詞からも解る。

And it is thought abroad that 'twixt my sheets
Has done my office. I know not if't be true;
Yet I, for mere suspicion in that kind,
Will do as if for surety.(Ⅰ.ⅲ 381~384)
世間の噂では奴は俺の寝床に這いずり込み、俺の代わりを勤めやがったという。本当かどうか、俺には分からない。だが、俺という男は、そうと聞いたら、ただの疑いだけでも、あたかも確証のあるもののごとくやってのけなければ気がすまないのだ。

これを聞く限りでは、寝床に這いずりこんだかもしれない事よりも、オセローへの目に見える復讐の動機の後付けが成された事に重点を置いている。彼の本当の動機は目に見えないところから既に始まっているのだ。

まるでそれは、人間の心を巧みに操り、「善」を「悪」という道具に変え、押しては引き、引いては押すという絶妙な加減と駆け引きにより嫉妬という悪魔を生み出し、その悪魔のレールを復讐の対象者の前に引くことにより、イアーゴー自身がヴェニスに必要か否かの判断を行い、ヴェニス社会からの異物と思われる者の排除を自らが行っているかのようである。しかしながら、逆にイアーゴーは自分自身を否定したくて、その矛先

をオセローやデズデモーナなどに向け、彼らの存在を消す事で自分自身をも消したのかもしれない。結果的に彼は何でありたかったのか。神か？それとも悪魔か？いや、きっと彼はヴェニス社会に翻弄されて生きるのではなく、自己を持ち、「イアーゴー」(すなわちギリシア語で「私(ego)」)という名に相応しく、何かに影響されたイアーゴーではなく、一個人としてのイアーゴーという人間になりたかったのだろう。しかし、シェイクスピアは『オセロー』でそれを許さなかった。あくまでも、舞台効果も含め、イアーゴーはヴェニスの負を反映したヴェニスのイアーゴーでなければならなかったのだ。そして、だからこそシェイクスピアは作品中で個人を出せなかったイアーゴーに、あえて「イアーゴー」という名前を付けたのかもしれない。

終わりに

ヴェニスが舞台になっているシェイクスピア作品は『オセロー』と他に『ヴェニスの商人』が挙げられる。その両方共に特異な地ヴェニスが深く関わっており、『オセロー』ではその中で黒人と白人の問題を取り上げ、『ヴェニスの商人』ではヴェニスにユダヤ人であるシャイロックを登場させ様々な問題提起が成されている。舞台をヴェニスにすることでシェイクスピアは一つの大きな舞台効果をもたらしたと言える。

少なくとも『オセロー』においてヴェニスがどれだけ重要だったかということはイアーゴーを見れば一目瞭然だろう。彼は一登場人物でありながら、影の主人公を担った。そして『オセロー』において彼は一身に「悪」を背負った。こうすることで、シェイクスピアは、先にも述べた、ヴェニスの商人の持つ商業的な頭の回転の良さ、優れた開拓能力、誠実さといった気質を大いに認めながらも、その反面ヴェニスの商人が培った冷静沈着な打算、抜け目のなさ、ずるさ、汚さなどを作品中で表し、大きく批判しているという事が窺える。またオセローが黒人なのにも関わらず、プラスイメージの強い登場人物とし、少なからず肯定した事に関しては、シェイクスピア自身が、黒人に対し偏見を持っていなかったというよりは、作品に意外さ、深さ、興味深さなど様々な要素を与える存在の一つであったと考えていたのかもしれない。

註

（1）ヴェニスは、古来はラテン語でウェネティア（Venetia）と呼ばれた。英語でヴェニス（Venice）、フランス語でヴニーズ（Venise）、ドイツ語でヴェネディヒ（Venedig）と呼ばれる。日本語ではその表記の揺れが激しく、イタリア語から来たものでもヴェネツィアをはじめとして、ヴェネチア、ベネチア、ベネツィア果てはベネティア、ヴェネティアなどもある。英語由来はヴェニス、ベニスなどがある。またヴェネツィア方言ではVenesiaとなる。
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%a7%E3%83%8D%E3%83%84%E3%82%A3%E3%82%A2）ここでは、名称を「ヴェニス(Venice)」で統一し、述べていくものとする。

（2）ヴェニスの初期に書かれた伝説。西暦452年ローマ帝国末期、蛮族の侵入が、「ローマの平和」になじんでいたヨーロッパの人々を、恐怖の底に突き落としていた頃の話である。中でもアッティラの率いるフン族は、その狂暴で、他のどの蛮族よりも怖れられていた。イタリアの北東に位置するヴェネト地方に住む人々は、彼らの司教座教会のあるアクィレイアが、この怖ろしいアッティラに襲われたと聞いて動転したのであった。
司祭は、神に祈るというよりも、どうしようもない絶望を訴えでもするかのように、天に向かって両手を広げた。
「塔に登れ。そして、そこから海の方角を見よ。お前たちの見る地が、これからのお前たちの住家になる。」（神からの御告げ）

人々は、教会の塔に登った。その塔からは、ところどころが露出している沼沢地帯が見えた。葦が一面に繁っているだけの干潟には、樹の影さえもない。そこは大陸からの川の流れに乗ってくる土砂、そしてアドリア海の波と風の力によって作られた湿地帯であった。

だが、神の指示があったのだ。人々は、富める者も貧しき者も、男も女も子供も、司祭を先頭に、その地に移っていったのである。所有する財宝や家具一切を持って移動したほかの土地の人々とちがっていたことは、これからヴェニス人は、まず何よりも先に、住居を造る木材を持っていかなければならない事であった。彼らの新天地には、魚のほかには、何一つ無かったからである。だが、少なくとも、命だけは助かったのだった。

この時避難してきた先が現在のトルッチェロ島である。足場が悪い湿地帯のため、侵入者は追ってくることが出来ず、避難してきた人々はしばらくの間、ここに暮らし続けることになる。

塩野七生『塩野七生ルネサンス著作集　4、海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上』(新潮社、2001年), p.13～14 。

(3) 前掲書　p.15。

(4) 前掲書　p.16。

(5) 永井三明『ヴェネツィアの歴史　共和国の残照』(刀水書房、2004年) , p.6。

(6) 塩野七生『塩野七生ルネサンス著作集　4、海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上』(新潮社、2001年), p.18。

(7) 前掲書　p.18。

(8) 前掲書　p.18。

(9) 前掲書　p.22。

(10) 前掲書　p.43。

(11) 前掲書　p.24。

(12) 前掲書　p.223。

(13) 前掲書　p.238。

(14) 前掲書　p.238。

(15) 前掲書　p.239。

(16) http://www.tetsureki.com/home/labo/hyakke/yonabe-02.html

(17) 塩野七生『塩野七生ルネサンス著作集　4、海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上』(新潮社、2001年), p.240。

(18) 塩野七生はこの改革について、「この改革によって確立する政体が、共和国の崩壊に至るまでの約500年間、ほとんど変えられないで続く政体になろうとは、一般市民や有力者階級に位置する貴族でさえもおそらく自覚していなかったであろう。」と言っている。

(19) 塩野七生『塩野七生ルネサンス著作集　4、海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上』(新潮社、2001年), pp.262～263。

(20) 前掲書　p.28。

(21) 前掲書　p.233～p.234。

(22) 前掲書　p.235。

(23) http://www.tetsureki.com/home/labo/hyakke/yonabe-02.html

(24) 塩野七生『塩野七生ルネサンス著作集　4、海の都の物語　ヴェネツィア共和国の一千年　上』(新潮社、2001年), p.161。

(25) Othelloからの引用は全て大修館版による。日本語訳については、小田島雄志訳『シェイクスピア全集　オセロー』(白水社、1988年)　からとする。

(26) レスリー・フィードラー『シェイクスピアにおける異人』川地美子訳(みすず書房、2002年), p.241。

(27) ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアVI オセロー/十二夜』木下順二訳(講談社、1989), p.377。

(28) http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

(29) http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

(30) http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

(31) ジョン・ドラカキス「ひき蛙の飼育～『オセロー』における父権制と主体の問題～」青山誠子/川地美子編『シェイクスピア批評の現在』　(研究者出版株式会社、1993年), p.148。

(32) 小沢博「3. 異人を印す―シャイロック考―」今西雅章・尾崎寄春・斉藤偉編『シェイクスピアを学ぶ人のために』(世界思想社、2000年),　p.110。

(33) William Shakespeare, THE COMEDY OF ERRORS, The Arden Shakespeare, ed. by R.A.Foakes. Routledge, London, 1962/1963.
日本語訳はウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアII　タイタスアンドロニカス/間違いだらけ』訳者:木下順二(講談社、1989年)。

(34) William Shakespeare, HENRY　V, The Arden Shakespeare, ed. by T.W.Craik. Routledge, London, 1947/1968.
日本語訳は『シェイクスピア全集　ヘンリー五世』訳者:小田島雄志(白水社、1988年)。

(35) William Shakespeare, Twelfth Night, The Arden Shakespeare, ed. by T.W.Craik .Routledge, London and New York, 1975/1988
日本語訳は『シェイクスピア　十二夜』訳者:三神勲(角川書店、2004年)。

(36) ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアVI オセロー/十二夜』木下順二訳(講談社、1989年), p.378。

(37) イギリスではフローレンス、イタリアではフィレンツェと呼ばれている。ここではフローレンスで統一する。

(38) William Shakespeare, THE TAISHUKAN SHAKESPEARE　OTHELLO, 笹山隆編(大修館書店、2002年), p.43。

参考文献

永井三明『ヴェネツィアの歴史　共和国の残照』(刀水書房、2004年)。

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア全集　オセロー』小田島雄志訳（白水社、1988年。）

レスリー・フィードラー『シェイクスピアにおける異人』川地美子訳(みすず書房、2002年)。

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアVI オセロー/十二夜』木下順二訳(講談社、1989)。

小沢博「3. 異人を印す―シャイロック考―」今西雅章・尾崎寄春・斉藤偉編『シェイクスピアを学ぶ人のために』(世界思想社、2000年)

William Shakespeare, THE COMEDY OF ERRORS. The Arden Shakespeare, ed. by R.A.Foakes. Routledge, London and New York, 1975/1988

William Shakespeare, HENRY　V. The Arden Shakespeare, ed. by T.W.Craik.　Routledge, London and New York, 1947/1968.

William Shakespeare, TWELFTH NIGHT. The Arden Shakespeare, ed. by T.W.Craik . Routledge, London, 1962/1963.

William Shakespeare, THE TAISHUKAN SHAKESPEARE　OTHELLO, 笹山隆編(大修館書店、2002年)

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアII　タイタスアンドロニカス/間違いだらけ』木下順二訳(講談社、1989年)

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア全集　ヘンリー五世』小田島雄志訳(白水社、1988年)

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア　十二夜』三神勲訳(角川書店2004年)

ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピア全集　オセロー』小田島雄志訳(白水社、1988年)

参考インターネット

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%a7%E3%83%8D%E3%83%84%E3%82%A3%E3%82%A2

http://www.tetsureki.com/home/labo/hyakke/yonabe-02.html

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/esanu/news_letter79.html

(卒業論文指導教員　金山愛子)